

「説明する力」を向上させるための高校世界史の授業実践

ーシンキング・ツールの有効的活用を目的としてー

梅野史子（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

中田富士男 上藪恒太郎 柳田泰典 楠本研（長崎大学教育学部）

1 はじめに

（1）今日の現状

現在、世界史は「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に生きる民主的・平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」教科と文部科学省により位置付けられている。世界史は地歴科において唯一の必修科目であり、中心的な位置づけを与えられている。そのような中で、高等学校の地理歴史科の学習内容については、平成21年学習指導要領の改訂に伴い、以下の内容が新たに加えられた。

- ①世界史・日本史・地理相互の関連付けを図ることを各教科の目標に明示している。特に必修科目である世界史においては、地理や日本史にかかわる内容を充実するよう改訂された。
- ②各科目に課題を探究する学習を設けるとともに、論述、討論などの言語活動を充実させること。
- ③各科目において地図、年表をはじめ様々な資料を活用した学習の重視。

加えて、文部科学省による学習指導要領解説の中では、世界史Bについて次のような点が改善の具体的事項として挙げられた。

「世界史Bについては、地図、年表、資料などを活用し、諸地域の地理的条件や日本の歴史との関連に留意しながら、世界の歴史の大きな枠組みと流れを理解さ、文化の多様性・複合性に関する認識を深めさせるとともに、適切な主題を設定して追究する学習を一層重視して、世界史の学び方や歴史的思考力を培うようにする」

以上の内容から、現在の高校世界史が抱える課題がうかがえる。高等学校の授業構成は、小・中学校と多少異なり、しばしば知識詰め込み型、センター試験重視との批判がある。しかし、これは高校の教育現場のみで解決・改善させるものではない。要は、大学側が求める人材を育成しているにすぎない。また、そのような実態においても上記のような資料活用能力や大きな枠組みの理解、興味・関心を高める主題を設定することは必要であり、今後の課題である。

また、教科書をどのように教えるのかについても課題が多い。今日使用されている歴史の教科書の特徴として、一弛一張的な史観に基づくものが挙げられる。全体的に国家や人物の盛衰を中心に描かれており、大まかな流れについては生徒の個人の学習に左右されている状態である。

さらに、教育実習中に生徒に対して行った聞き取り調査においても、高校世界史が抱える課題をみることができる。聞き取り調査は中学2年生、高校2年生を中心に行い、主に社会科、歴史の授業についての生徒が持つイメージについて話してもらった。その中で多かったのが、次のような意見である。

- 歴史は暗記科目である（好き・嫌いにかかわらず）。
- 地名・人物名が多くて暗記が大変である。
- 試験が終わるとすぐに忘れてしまう（特に高校生）。
- 世界史は日本史に比べ暗記する量は少ないが、学習する地域が広く混乱する。
- 世界史はカタカナばかりで覚えられない。

このような聞き取り調査の結果から、社会科（歴史）が抱える課題が、その内容より、授業の展開方法にあるように感じる。今までの社会科の授業構成の現状と課題について、森分（1987）は次のように指摘する。

- ①過剰教材
- ②事象の断片的羅列的学習
- ③転移しない知識
- ④知的に挑戦しない面白くない授業

これらは今日一般的に行われている社会科の授業構成である。主な特徴として、やはり核になっているのは「教科書をどう教えるか」である。1年間で教えるべきとされる内容は決まっているため、必然的に1時間の学習内容も決定される。よって1時間における指導内容はノルマ化され、生徒はそれを消化することに追われている。また、年間指導計画に追い付かない場合は、プリントの配布や生徒の自習にゆだねられる。では、どのような点に留意し、どのような授業展開を目指すべきなのだろうか。森分（1987）は、同著において社会科の本質と、それを視野に入れた授業構成について、次のような提案をしている。

社会科のねらいの本質は、『社会的事象・出来事を科学的に説明できるようにさせる』ことにある。

説明を求める問いを提示された時、生徒に必要なのは「だれが」「いつ」「どこで」「だれに」といった問いを把握し、それらを関連付けて答えを導くことができる力である。本研究を通して、高等学校の世界史における「説明する力」の向上のための授業構成・展開方法について検討し、その成果について考察したい。

（2）研究の目的

本研究は、普段の社会科の授業において、生徒にいかにして基礎的・基本的な知識を関連付けることで学習内容の概要を理解させるかについて検討したものである。前述したように、これまで様々な研究論文や実践報告書に多くの授業案やワークシートの活用例などが挙げられている。しかし、学校現場での教育内容や方法論との距離は未だに近いとは言えない状態にあるのではないだろうか。本研究を進めるにあたっては、先行研究や実践報告を参考にするとともに、実際の教育現場の実態や生徒の状態を十分に把握した上で自分なりの授業展開を提案し、

実施した。1時間の授業で生徒に「学ばせたいこと」は変わるため、その度に教師は方法や手順を検討し直す必要がある。先行研究における理論や実践報告での手法が、実際の授業においてどのように活用でき、どのような効果があるのか、本研究を通して実践し、検討したい。

2 研究の内容・方法

本研究は、学校教育実践実習Ⅰ、Ⅱにおいて実際に指導補助や実践授業を行いながらその方法と効果について検討を重ねたものである。両実習とも長崎県内の県立高校で実施し、第2学年の世界史のクラスを担当した。実践実習Ⅰでは主に指導補助を通して実際の教育現場の問題点について担当教官との検討を行い、実践実習Ⅱに向けて問題点をより具体化した。

また、実践実習Ⅱでは実際に計8回の実践授業を行うことで、研究テーマに沿った形での授業の展開方法について検討し、実践した。実践実習Ⅰで具体化した課題をもとに研究テーマを設定し、「イスラーム世界の形成と発展」という単元の指導計画を立てた。その中でシンキング・ツールを活用し、生徒が世界史の流れをより相対的に捉える事ができる様な展開を提案した。また、実践実習Ⅱにおいては連想調査を実施し、単元の学習を始める前と終わった段階での生徒の知識の移り変わりを調査した。最終的な考察は、授業中の生徒の様子、ワークシートの検証、連想調査によって行った。

3 実践による検証

本研究は、教育現場での実践中心にその効果と課題について検討するものである主に学校教育実践実習Ⅰ・Ⅱにおいての実践が中心になっているが、ここでは実際に実践授業を行った実践実習Ⅱを取り上げる。

学校教育実践実習Ⅱにおいては、前期に行った実践実習Ⅰの内容と課題を踏まえ、実践授業を通して研究を行った。実践実習Ⅰでは、世界史の学習における「知識の関連付け」をテーマとしながら、「知識の関連付け」とは何を指すのかについて検討した。その結果、「説明する」ことで、関連付けの力を測ることができるのではないか、という方向性が固まった。実践実習Ⅱでは、教科書第5章の「イスラーム世界の形成と発展」を担当することが決まった。イスラーム史は、アラビア半島の気候の特徴や、その中で誕生したイスラーム教の成立から始まる。初めに担当教官と話し合ったのは、「いかにしてイスラームの独特な世界観を生徒に印象づけるか」だった。「イスラーム」世界は、今の私たちの生活とは最もかけ離れた世界であり、また、最も指導の際に配慮を要する地域の歴史である。事前の生徒の「イスラーム」についての印象（連想調査）からも、否定的な印象が数多く見られた（「暗い」「怖い」「テロ」など）。本研究のテーマである「説明する力」を向上させるための活動は、授業の内容に応じて取り入れた。イスラーム史において重要なポイントは次の2点である。

- ①初めはアラブ人によって構成されていた国家が、分裂・発展を繰り返し、広範囲で多民族（他民族）によって構成されるようになった点
- ②イスラーム世界の特徴としてイスラーム教の教えが大きな影響を及ぼしている、という点

よって、この2点について授業で取り扱う際に、生徒による活動を取り入れることにした。また、本実習では、実習期間の始めと終わりの段階で連想調査を実施した。連想調査では、刺激語に対する生徒の直感的なイメージを知ることができ、授業を行ったことによる刺激語の反応の変化を分析することで、授業評価を行うことができる。また、生徒が書き出すのは刺激語に対する知識でもあるため、知識量の変化を見ることもできる。実践実習Ⅱでは、「説明する力」の向上のために授業における展開の工夫と、連想調査によってその有効性を検証したい。

【主な実践内容】

では、実際の授業においてどのようにして「説明する力」を身につけさせることができるのだろうか。授業において生徒に歴史的事象についての説明を求めるにあたって、主に2種類の方法がある。1つは、口頭での説明を求める方法である。教師が「フランス革命が起きた経緯を説明せよ」「国家分裂の原因は何だったのか」などと問い、生徒はノートや教科書・資料集を確認し、答えるというものである。しかしこの場合、実際生徒に与えられる時間は3～5分程度であり、また特定の（指名された）生徒のみが対象になってしまう。しかも教師、生徒ともに口頭でのやり取りのため、生徒にとってフィードバックの対象になりにくい。もう1つは、記述による説明を求める方法である。この方法を取り入れた場合、普段の活動より時間を要するが、生徒にとってはじっくり考える時間が与えられる。また、自分で考えた成果が手元に残るため、その後の学習にも役立てることができる。また、教師にとっても、生徒の学習の理解度や、思考の過程を見ることで、その場で指導することもできる。本研究においては、実習では授業時間数や取り上げる学習内容が限られているため、記述を重視した展開を試みた。授業において生徒に記述による説明を求めるにあたり、通常の授業時に使用するノートではなく、ワークシートを使用した活動を取り入れることにした。授業においてワークシートを取り入れる際、関西大学で研究されているシンキング・ツールを参考にした。関西大学では思考力の育成や、「考えるための手助け」のためのツールとしてシンキング・ツール実践を行い、その在り方が検討されている。シンキング・ツールの特徴には、次のようなものがある。

- ①頭の中の曖昧なイメージに様々な角度から光を当て、意識させる。
- ②単一の文章では表現が困難なイメージを、断片的であっても外部に出す。
- ③様々な事象を比べる視点を与え、またその必然性を意識させる。
- ④複雑な事柄を単純にし、物事を大枠で捉えやすくする。
- ⑤一見関係性が見えないもの同士の関係性に気付かせる。

本実習では、計 8 時間の実践授業を通してイスラーム史の指導を行った。その中で授業の展開においてシンキング・ツールを活用したのは 2 回である。

○1 回目（平成 21 年 10 月 26 日）

この実践授業は、イスラーム史の学習を始めて 4 時間目の時間に行ったものである。前時の授業においては、ウマイヤ朝の崩壊の原因が税金の徴収方法やその対象者にあったこと、アッバース朝が成立したことでイスラーム帝国として地理的にも拡大したことについて学習した。その後他民族によって構成される国家に分裂、トルコ人によって征服された経緯を説明した。この一連の流れは、イスラーム史の学習において最も生徒がつかずく箇所である。多くの王朝名が登場し、国家によって宗派や民族が異なる。そこで 4 時間目の授業では、復習の意味も含めて、それぞれの王朝名と特徴、地理的な位置関係の習得を目標とした。以下は、4 時間目の授業の中で生徒が記入したワークシートである。生徒にとっては既習であった内容（イスラーム帝国の発展と分裂の経緯）について、授業の中で「説明」を求めた。

時間	教師の手立て	生徒の活動
5 分	<p><導入></p> <p>①「時の流れを簡単に説明する。(イスラーム帝国が分裂し、セルジューク朝がおこるまで)</p>	<p>・資料集を見ながら復習する。</p>
15 分	<p><展開 1> ←シンキング・ツールの活用</p> <p>前時に学習した、イスラーム帝国が分裂してから、セルジューク朝がおこるまでの経緯を、ワークシートを使って説明させる。(一定時間を置いて、教科書、ノート、資料集を参考にさせる)</p>	<p>・ワークシートに記入する。</p> <p>・なぜこのようなワークシートをするのか理解する。</p>
15 分	<p><展開 2></p> <p>①イスラーム帝国が分裂したものの、トルコ人の活躍でイスラーム世界がより広がっていったことを復習する。</p> <p>②トルコ人が台頭した後、今度はモンゴル人が勢力を増していったことを説明する(モンゴル人によっても、イスラームの文化が広がっていったことを印象づける)。</p>	<p>「セルジューク朝・・十字軍のきっかけ」を加える。</p> <p>・13 世紀の世界について資料集を参考にする。</p> <p>・教科書 p106 を参照</p> <p>・資料「バグダードの陥落」</p>
15 分	<p><まとめ></p> <p>9 世紀から 12 世紀までのイスラーム史の流れを確認する。</p>	<p>ワークシートを見直し、イスラーム帝国の発展と分裂の経緯について大まかに説明できるようにする。</p>

イスラーム帝国分裂の経緯 10/26(月) 2年2組 氏名

イスラーム帝国が分裂した経緯を、次の語句を使って説明してください。

ウマイヤ朝	アッバース朝	後ウマイヤ朝	フワイフ朝
ファーティマ朝	セルジューク朝	カリフ	マムルーク
イスラーム教	スンニ派	シーア派	イベリア半島

自由記述欄

ウマイヤ朝 → 革命 → アッバース朝 → 分裂 → セルジューク朝

661 ~ (イ25-4高④) (F.A.10④) 11c

アラブの国

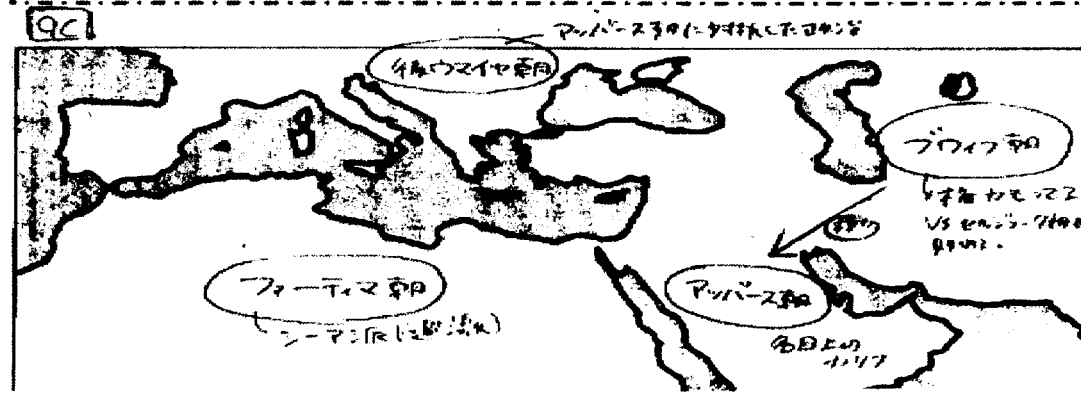
950 ~

シーア派 ← スンニ派

イスラーム教

アラブを治めました。

セルジューク朝はトルコ人の高貴族が、



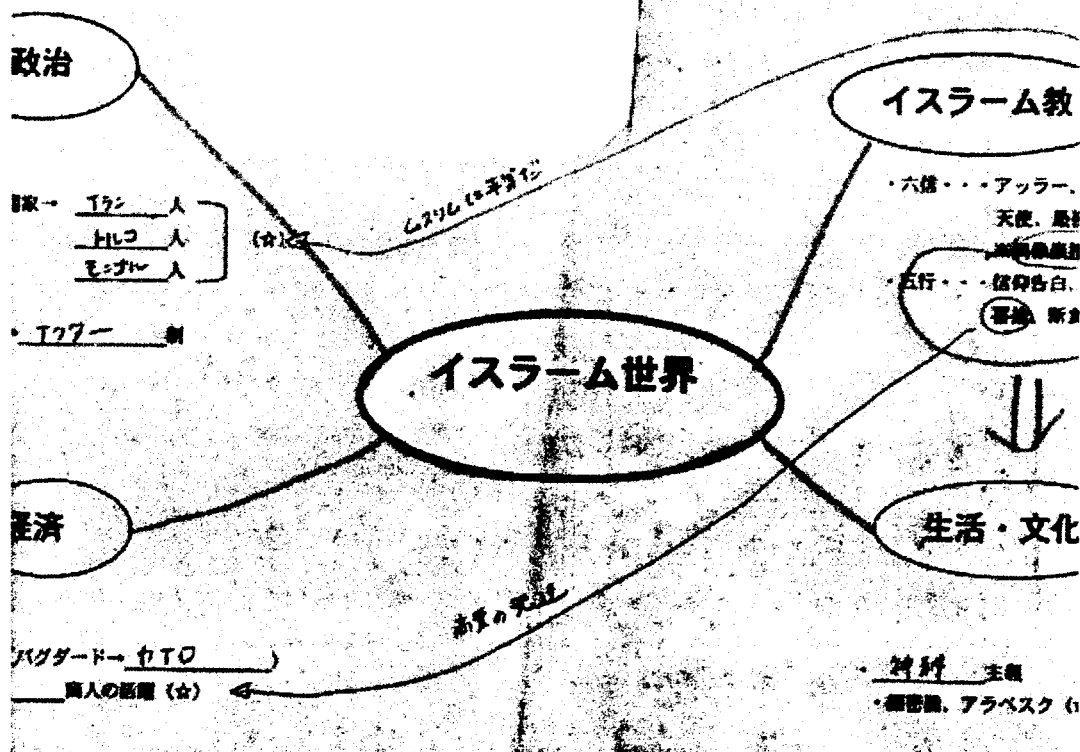
【考察】この生徒は、まずは白地図を使ってキーワードを整理していた。イスラーム帝国の分裂を取り扱った時間は、ほとんどが教科書ではなく、資料集の地図を見ながら進行していたためと思われる。自由記述欄にはキーワードの順番とその経緯が書き込まれており、白地図に対応した説明ができています。前述したように、「説明する」ことの根底には「知識を関連付ける」ことがある。この場合においては知識の関連付けはできているが、説明するまでには至らなかった。授業後、担当教官と話し合い、「本当に考えている生徒」「ただ教科書を写してしまった生徒」の2種類に分類した。このような活動の際には評価方法も明確化する必要がある。評価のポイントを絞ることで指導のポイントも単純化できると感じた。

○2回目 (平成21年11月10日)

2回目の実践授業は、イスラーム史の第8時間目である。本実践授業までに、生徒はイスラーム世界の成立と発展について学習している。しかし、イスラーム世界の根底にあるイスラーム教そのものについての学習はしていない。よって、8時間目の前半に「そもそも、イスラーム教とはどのような宗教なのか」について問いかけることで、イスラーム世界と宗教の関係性についてイメージマップを使って考える、といった展開を試みた。また、最後の10分間を使って連想調査

を実施した。以下は、4 時間目の授業の流れ（概要）と、展開 1 で生徒が記入したワークシートである。

	生徒の活動	教師の手立て	備考
導入 5分	<p>1 イスラーム世界の発展の経緯を復習する。</p> <p>① イスラーム帝国の形成・分裂・発展の経緯の復習。</p> <p>② インド・東南アジア・アフリカへの広がりを復習する。</p> <p><u>予想される答え 1：イスラーム教徒</u></p> <p>2 イスラームについて、連想調査の結果を思い出し、再度イスラームとは何か考える。</p> <p>1 資料集 p88「イスラーム教の世界」イスラーム教の特色を参考にし、理解を深める。</p> <p>① 実際にイスラーム圏に旅行に行く際、注意する点について理解する。</p> <p>② 六信五行・禁忌について資料集を参考に理解する。</p>	<p>① これまでの流れを復習する。（アラブ人による国家が、他民族によって広がっていったことを確認する）</p> <p>② 海路の発達やムスリム商人の活躍が要因となっていたことを確認する。</p> <p><u>発問 1：ムスリムとは何か。</u></p> <p>2 そもそも、イスラームとは何か、生徒に投げかける。</p> <p>1 イスラーム教とはどのような宗教なのか、資料をもとに推測する。</p> <p>① イスラーム圏（サウジアラビア）に旅行に行く際の注意点を紹介する。</p> <p>② 六信五行・禁忌について生徒に質問を投げかける。</p>	<p>・教科書・既習のノート・ワークシートを見直す</p>
展開	<p><u>MQ. イスラーム世界の発展とイスラーム教は、どのように関係しているのだろうか。</u></p> <p>① イメージマップとは何か理解する。</p> <p>② ワークシートを使って、政治・経済・生活の面からイスラーム世界を考察する。【活動】・・・10分</p> <p>③ 空欄の語句を埋める。</p> <p>④ イスラーム教の関連性をワークシートに書き込む。</p> <p>⑤ イスラーム世界の発展とイスラーム教の関連性について理解を深める。</p>	<p>イスラーム世界の発展とイスラーム教の関連性について考えさせる。</p> <p>① イメージマップについて説明する。</p> <p>② ワークシートに記入し、イスラーム世界を考察させる。</p> <p>③ 空欄の答え合わせを行う。</p> <p>④ イメージマップを完成させる。</p> <p>⑤ イスラーム教の教義、信仰がイスラーム世界の発展に深く関わっていることを理解させる。</p>	<p>シンキング・ツールの活用</p>
まとめ	<p>① 連想調査を行う。</p> <p>② イスラーム世界の全体像を理解し、自分なりにイスラーム史を考察する。</p>	<p>① 連想調査を行う。</p> <p>・結果をまとめる。</p> <p>② 世界史の流れにおけるイスラーム史の位置付けを理解させる。</p>	



8 時間目の実践授業で取り扱ったシンキング・ツールは、イメージマップをベースにイスラーム世界の全体像を把握する目的で活用した。授業の前半にはイスラーム教の特徴について説明し、私たちの生活との違いを印象付けた。ワークシートでは、「イスラーム世界の発展と、イスラーム教の教えとの関係性について考える」ことをねらいとした。イスラーム教の教え（六信五行）が、イスラーム世界の政治・経済・生活面の発展に影響していることを前提とし、それぞれがどの分野に関連しているのかについて生徒に書き込ませた。生徒は「喜捨」「偶像崇拝の禁止」を中心にそれぞれがどのように関連しているのかを考えているようだった。結果、ほとんどの生徒が「喜捨→ムスリム商人の活躍」、「国家の広がり→コーラン」「文化の繁栄→偶像崇拝の禁止」などを関連付けることができていた。指導の際、さらにそれらが関係付けられる理由について記述を加えるように助言したが、その段階まで進めた生徒は2, 3人だった。Tさんは、それぞれのカテゴリを色別し分け、さらに、イスラーム教の教えが生活全体に影響していると記している。「説明する」段階には至っていないが、ワークシートを使ってイスラーム世界とイスラーム教の関連性について理解していると思われる。

【連想マップによる考察】

前述したように、「説明する」ためには、学習により知識を得ることも欠かせない。連想調査によって、実際の授業においてどの程度の知識の習得がなされたの

【考察】

○カテゴリマップ「イスラーム」pre 調査結果

- ①回答語の約半数が「その他」に位置する。
- ②「その他」に分類される語句も、「戦争」「怖い」などのマイナスなイメージや、「黒人」などの偏ったイメージが多い。
- ③「宗教」分野の語句は、カテゴリマップにおいても割合が多い。
(イスラーム=イスラーム教というイメージ)

④「文化」において、建築や暮らしなどではなく、気候に関するイメージが多い。

⑤「政治」「経済」分野に属する語句が少ない。

○カテゴリマップ「イスラーム」post 調査結果

- ①「宗教」分野に属する語句が半数を占める。
- ②「イスラーム」「アッラー」「喜捨」などが円の中心部分に属する。
- ③「政治」分野の中心に、「アラブ人」「イラン人」「モンゴル人」などが位置する。
(国家の変遷=支配層の変化であることが印象づけられている)
- ④「文化」「その他」分野は減少しているが内容が正確になり、経済分野の語句が増えた。
- ⑤「文化」分野では「神秘主義」「アラベスク」が多い。文化を取り扱った授業では、建築物の写真や細密画の写真を多く見せたが、あまり印象に残っていなかったようである。

【考察】実践授業では、イスラーム史を政治、経済、文化、宗教から捉えた授業展開を試みた。pre 調査におけるカテゴリマップでは、政治、文化、宗教に関するイメージはあるものの、経済に関するイメージはほぼなく、そのバランスも「その他」がほとんどを占めている状態だった。しかし、post 調査では「その他」分野の語句が減少し、「文化」以外のカテゴリにおいては全体における割合が増加している。「宗教」分野は post 調査では 51%を占めるが、これは偏って指導したのではなく、実践授業の最終日に宗教分野を取り扱ったためと思われる。

4 成果と課題

本研究では、教育実習での実践授業を軸に「説明する力」の向上について検討した。「説明する力」を育成するための活動においてはシンキング・ツールを活用し、「説明する」活動の根底にある「知識」を図る方法として、連想法を使って授業全体の評価を行った。生徒にとって、過去に学習した 2, 3 時間分の内容を総括するといった活動はなじみのないものだったと思う。しかし、広範囲にわたる地域の事象を扱うことになる世界史の学習では、1 つの地域、単元、トピックごとに概要を理解することが必要である。それぞれの歴史的事実や地域的特徴を理解することが世界史の全体像の把握に繋がるのではないだろうか。しかし、一般に世界史の授業において、事象についての人物や年代について問うことはあっても、それらの関連性について考えさせることはあまりない。ワークシートを使っ

て普段取り組まない課題に挑戦し、それまでの内容を関連付けることで歴史の流れを掴むきっかけになったと思う。生徒にとって、その段階における自分の理解度の把握にもつながり、理解が出来ていない点も明確化する。実際の授業においてトピックごとに自分なりに考えをまとめ、全体の流れを把握することで、「考える」思考のパターンを身につけることができるのではないだろうか。本実践においてそのような活動を取り入れたことによって、それまでの知識をつなげて新たな認識を作ることができた。しかし、現段階では課題も多く残った。1つ目は、シンキング・ツールの活用方法である。今回の実践授業において使用したシンキング・ツールはチェーン図とイメージマップを基本的な要素として担当教官と作成したものである。また、活動内容に合わせて白地図も付け加えた形になっている。よって、本来のシンキング・ツールとしての形を授業に取り入れたわけではない。高等学校の世界史の授業での活用例は少ないが、その場合、ある程度の改善が必要である。シンキング・ツールは、その目的に応じて授業者が改善し、生徒の実態に合った独自のワークシートに作り直す必要がある。しかし、その場合、活動の目的の数に応じてシンキング・ツールの種類が出来ることになり、それでは「ツール」としての一般化には程遠くなってしまう。「シンキング・ツール」をあらゆる授業において活用し、有効化するにはどのようにしたらいいのだろうか。ここで、2つ目の課題が浮上する。シンキング・ツールを有効化するためには、授業構成そのものの在り方について考える必要がある。今回の実践授業では、「なぜ」を中心とした授業構成を展開した。そのような授業展開においては、授業における教師の発言、発問や生徒の発言、活動がそれらの問いの解決に結びつくようなものでなくてはならない。1時間の授業の流れ、さらには単元を通しての指導計画において最終的に「知識の定着を図」り、かつ、「歴史の概要を把握する」ことを目指したカリキュラムが必要である。実態に基づいたシンキング・ツールの改良と、そのための授業構成があつてこそ、シンキング・ツールは本来持っている有効性を発揮できるだろう。

5 参考文献・論文

関西大学・NPO法人学習創造フォーラム「thinking tool」2007年/水越敏行「社会科の授業評価」明治図書、1980年/宮崎正勝「早わかり中東&イスラーム世界史」日本実業出版社、2006年/森分孝治「現代社会化授業理論」明治図書、1986年/森分孝治、片上宗二編集「社会科」明治図書、2000年/森分孝治「社会科授業構成の理論と方法」明治図書、1987年/論文集編纂委員会編「学力の総合的研究」黎明書房、2005年/上菌恒太郎、糸山景太、藤木卓ら「授業設計理論と授業評価法としての連想調査」長崎大学教育学部技術教育教室、家政教育教室、教育学教室、2003年/黒上晴生「研究高次思考能力の育成をめざす授業設計法と評価に関する研究」関西大学、2007年